

東京新聞

夕刊

中日新聞東京本社
東京都千代田区内幸町二丁目1番4号
〒100-8505 電話 03(6910)2211

夏の記憶呼ぶ 浴衣セラピー

認知症の高齢者に浴衣を着せ、夏祭りなどに参加してもらうことで症状の進行を遅らせようと、千葉県浦安市が「浴衣セラピー」に乗り出した。心理療法の「回想法」をヒントに市職員が発案。「夏の記憶」で脳の活動を呼び覚ますのが狙いで、市は高齢者施設に贈る浴衣の寄付を募っている。

(市川通信部・林容史、写真も)

浦安市の認知症改善に期待 職員考案



贈られた浴衣を羽織る認知症の高齢者ら。千葉県浦安市高洲の老人ホームで

「浴衣はすてき」「若返ったよ」。十日、浦安市高洲の有料老人ホームで行われた浴衣贈呈の第一弾。白地に水色の柄などの浴衣を羽織った八十一、九十代の認知症の女性たちは、しわが刻まれた顔に笑みを浮かべて感想を口にした。

「皆、懐かしそうだった」と話す施設のケアマネジャー。着古した浴衣はおむつにしていた、と昔話を始めた入所者も現れたという。十八日から施設内で開く縁日には、浴衣を着せて流しそうめんなど「夏」を味わってもらおう。入所者の「変化」を施設中が心待ちにしている。

盆踊りや花火大会など心弾む夏の風物詩。「非日常の出来事は強く心に刻まれる。浴衣を着て参加すれば、楽しい記憶がよみがえり、回想法と同じ効果があるのでは」。浴衣セラピーを発案した市介護保険課主任主事の藤平孝行さん(三十八)は期待を込める。

回想法は一九六〇年代に米国の精神科医が提唱した。高齢の認知症患者の記憶を会話などで刺激。人生を再評価することで症状の進行を遅らせ、精神的な安定を図る効果があるとされる。懐かしい生活用品や玩具、建築物などが回想法に利用されている。

会話もなく、無表情で過ごす認知症の高齢者を、施設巡回で目にしてきた藤平さん。以前、職員研修で耳にした話がずっと気になっていた。認知症の女性に大好きだった着物を着せたら表情が豊かになり、背筋も伸びてすっかり歩いた。今年六月、有益な情報を市政に生かす「アンテナ職員」の肩書が加わったことを機に、今回の

アイデアを松崎秀樹市長に直接提案。一カ月で実施が決まった。高齢者施設に浴衣を贈るため、今月から古い浴衣の寄付を市民に呼びかけると、温泉施設などから浴衣二百六十枚と帯三十七本が集まった。「入所者が笑顔で語らう姿が見たい」。藤平さんは、市内の介護施設の定員に匹敵する千人分の浴衣の寄贈を目指している。

持続的なら効果

建築史・都市史が専門で回想法にも詳しい千葉大大学院工学研究科の丸山純講師の話。浴衣を使った例は聞いたことがないが、回想法に決まりはなく各地

で違ったやり方があるといい。一回限りのイベントだとあまり期待できないが、持続的な活動につなげていけば必ず効果は上がる。高齢者の負担にならないよう無理せず実践してほしい。